広場の造形

（1）苦行釈迦像（2 世紀）　　ラホール博物館（パキスタン）

（2）仏坐像（2 世紀後期）　　ニューデリー国立博物館（インド）

(3) 弥勒菩薩立像（2 世紀後期）　　ペシャワール博物館（パキスタン）

(4)「誕生と七歩」(2 世紀後期)　　カラチ国立博物館（パキスタン）

(5) 仏立像（部分）(2 世紀末期)　　マトゥラー博物館（インド）

(6) 釈　迦（2〜3 世紀）　　カラチ博物館（パキスタン）

(7) 釈迦坐像（2～3 世紀）　　ラホール博物館（パキスタン）

(8) 墓壇飾り板「ストゥーパ供養」(3 世紀後期)　　ニューデリー国立博物館（インド）

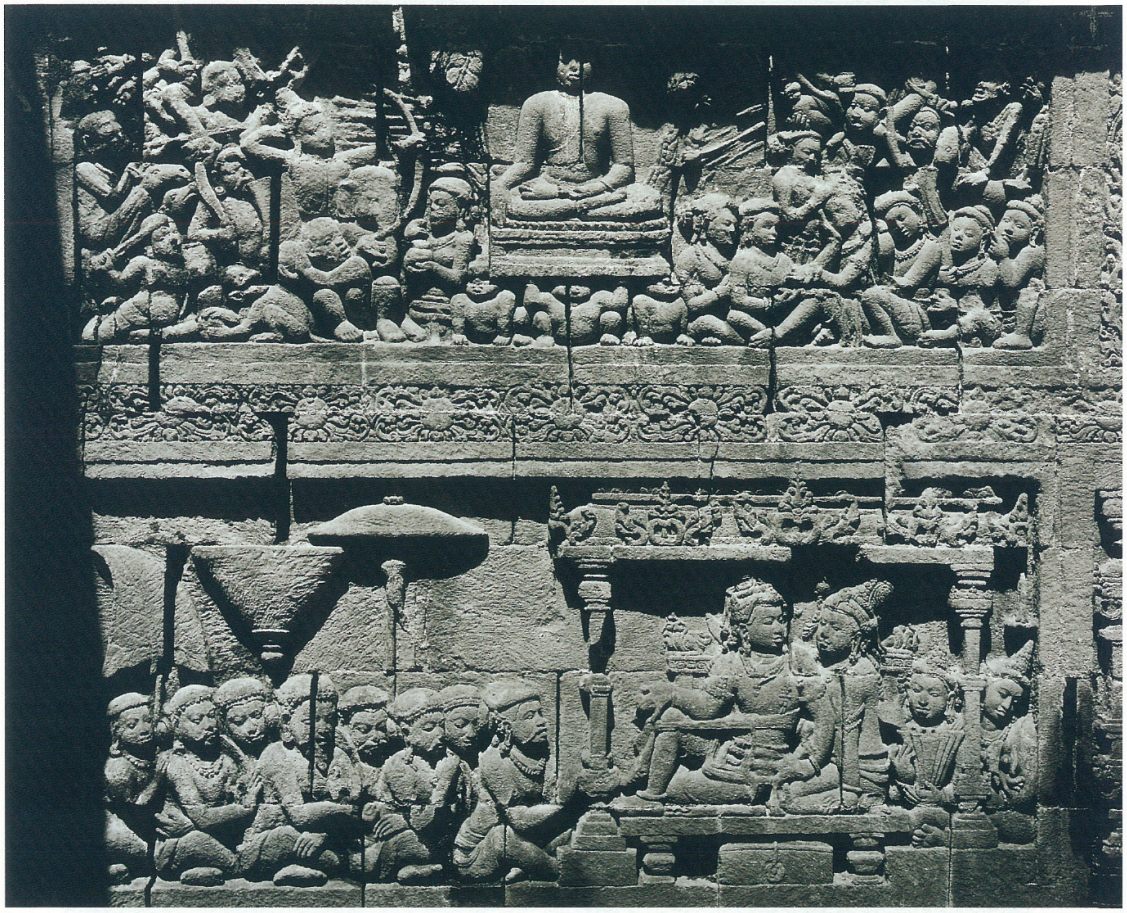
(9) 迦葉兄弟に礼拝される釈迦（3〜4 世紀）　　カブール博物館（アフガニスタン）

（10）仏　頭（5 世紀中期）　　マトゥラー博物館（インド）

（11）菩薩坐像（5～6 世紀）　　カブール博物館（アフガニスタン）

（12）菩薩立像（部分）（7 世紀中頃）　　国立慶州博物館（韓国）

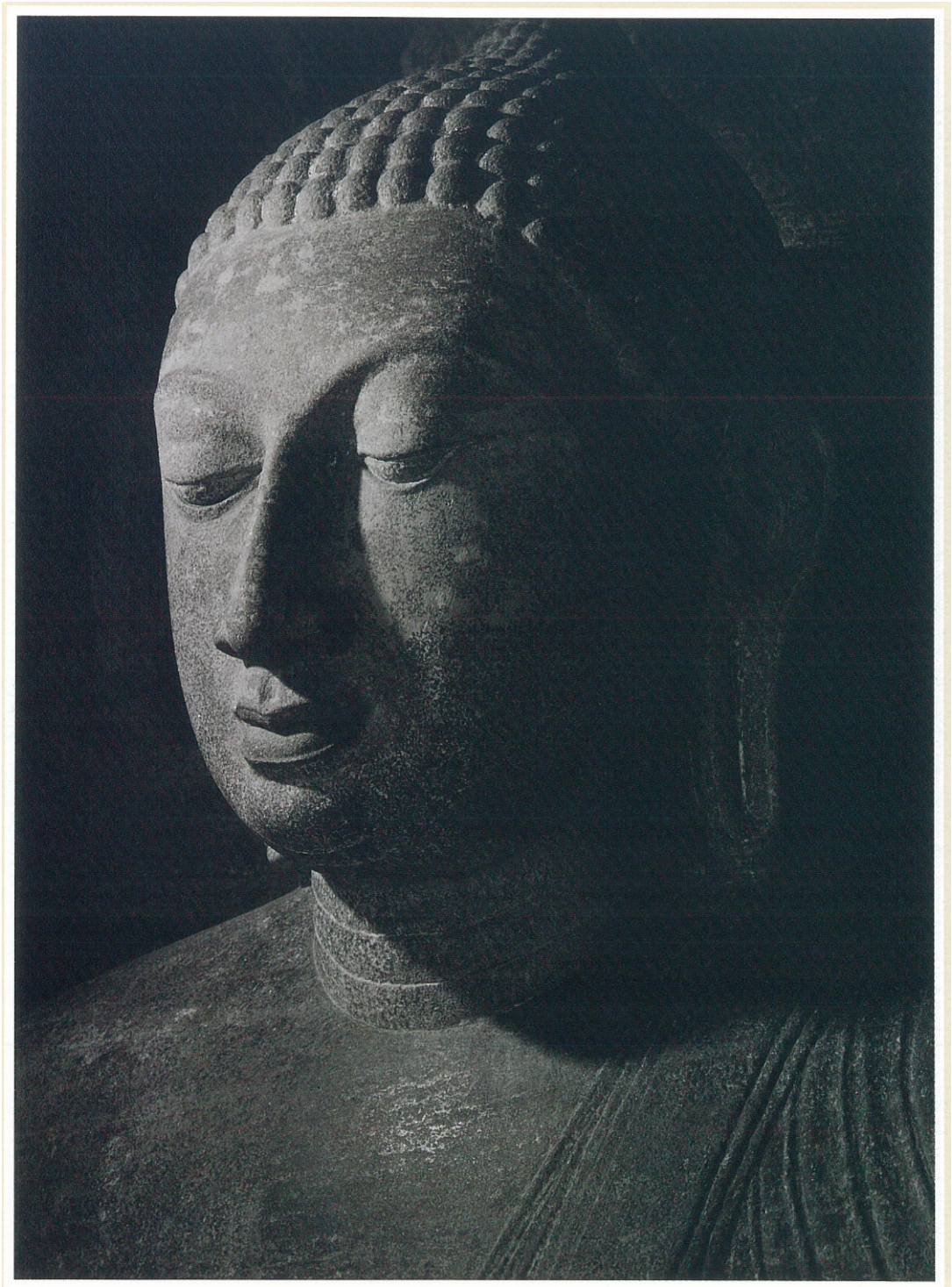
（13）仏坐像（7～8 世紀）　　カブール博物館（アフガニスタン）



（14）本生譚図（8～9 世紀）　　ボロブドゥール壁面浮彫（インドネシア）

(15) 仏　頭（8〜9 世紀）　　ジャカルタ博物館（インドネシア）

(16) 触地印仏坐像と仏伝の諸場面（11～12 世紀）　　パガン博物館（ビルマ）



（17）ガル・ヴィハーラ　禅定印仏坐像（12 世紀）　（スリランカ）

岩宮武二教授の姿勢

山　田　幸　平

岩宮教授から〈頼みたい用件がある〉と電話があったので、約束の刻限に緊張して待っていた。入るなり、ああこれは見晴らしのええ部屋やな、としばらく窓際に寄って、金剛山の山蔭を見入っていたが、正面に座ってもなかなか用件を切り出さず、灰皿を要求して煙草をすぱすぱ立て続けに二本のんでしまった。更にもう一本火を点けはじめたので、ああ、もう少し肥えたら市川崑にそっくりやなと思いはじめた矢先、その煙草を指にはさんだまま不意に用件を切り出した。
「あのねえ、仏教学のしかるべき学者を呼んでほしいのやけどねえ、これは先生の所しかあかんからねえ」

およそ半年の後、まず手近な仏教美術の研究者からと思って、後輩の山名伸生君に非常勤講師として来てもらうことにした。するとしばらくして、ユネスコによる仏教美術の写真集を手にすることができた。写真はすべて岩宮さんの手になるものであった。私は、山名君と、学校からの帰りに仏教美術について語り合いながら、――と言っても当方からの質問攻めばかりだったが――その度に、岩宮さんの端正な写真の一枚また一枚を想い出していた。一見、素人の眼から見ると、何の変哲もない写真のようにも見えるが、しかしながい時間をかけて眺めると、まことに調和の取れた世界であると共に、奥深い内部の構図が浮かび上ってくる。次第に私は岩宮武二の世界に捉えられ始めた。以前は、あの実存の写真家、土門拳の、人間をも含め物そのもの実存性を、写真が捉えた光線そのもののなかに発き出す仕事に、戦後の状況そのものを感じ続けていたが、岩宮武二の写真に接することによって、伝統の流れを明らかに抱きとめることができた。私は岩宮さんに感謝している。

また岩宮教授は、生前、じつに多彩な、また豪華な写真集をたくさん造っておられるが、仏像に関しては平成元年（一九八九年）の三月二十一日に集英社から出版された『アジアの仏像』上下二巻が、圧倒的な重みを持っている。この写真集のあとがきで、アジアの各地での写業は、大へん楽しく満足したと書いておられるが、ただ一つ中國での作業、特に敦煌では、次のように書いておられるのが私の眼を射る。「特に敦煌では、あの暗い窟内において、すべてを小型カメラにストロボを直結するだけで撮らねばならなかった。長い間の憧憬の地、敦煌まで来て、その条件と状況には困惑した。」この岩宮さんが記した「状況」という言葉の中に、不器用な撮影助手、山田幸平の姿も含まれているのだ。昭和五十年代の半ばに日本映像学会関西支部の主催で、敦煌調査団が結成された。団長は、当時日中交流に力のあった依田義賢教授、私たちは長崎から長安、黄河をさかのぼって炳霊寺を訪れ、更に砂漠を渡って敦煌に入った。立役者は岩宮さんだった。莫高窟の許される窟のすべての仏像を撮り、スライドにして団員に渡すというのであるから。敦煌到着の翌朝から岩宮さんの撮影が始まった。わたしたちは、岩宮さんを真ん中にして、ぞろぞろと最初の窟の中へ入って行った。敦煌の窟は、その多くは狭くて暗くて、わたしたち団員が十数名いっぺんに入ってしまっては身動きがとれない。岩宮さんが、じっと壁面を眺めているうちに、一人去り二人去り、すると粗末な足台に上

ってカメラを構えた岩宮さんが大きな声を出した。「暗い、光が足らん、誰か懐中電燈で仏さんを照らしてくれんかなあ」、見廻すと、依田、松井正、村松寛といった老教授しか残っていない。とっさにわたしは、「先生、僕がやりましょう」と言って傍に寄って懐中電燈をかざした。岩宮さんは、わたしを見下して、「せんせ、やってくれるぅ、たのむわ」と言ってあの人なつこい微笑を浴びせてくれた。この微笑はたった一度だけ、それから幾時間も、左手で岩宮さんの腰を支え、指示されるままに電燈を左に右に上部に下部にかざす作業が続くのだった。

この作業は二日以上続いた。写業を終えたとき、岩宮さんは黙って、きびしい横顔を見せていた。不肖の助手は、近寄り難かった。

だが、数日後、調査が終ってバスが莫高窟から遠ざかるや否や、岩宮さんはいつもの快活な風貌を取り戻していた。私に近寄り、私の肩をポンとたたき、「せんせ、敦煌の記録は書いてや」というや否や、バスを止め、多分、莫高窟全体の丘と背後の山並みを撮るためだろう、全速力で砂漠の中をかけて行った。

松井　正「敦煌の空」　1984 年 181.8×227.2 ㎝